

学位請求論文審査報告書

氏 名 澤崎 瑞央

論文題目 『大智度論』における不退転の研究

審査委員 主査 大谷大学教授 采畢 晃
博士（文学）[大谷大学]

副査 大谷大学教授 山本 和彦
Ph.D.[プーナ大学]
博士（文学）[大谷大学]

副査 東洋大学教授 渡辺 章悟
博士（文学）[東洋大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は、龍樹著・鳩摩羅什訳と伝承される『大智度論』を対象に、菩薩の修道過程の契機と考えられる「不退転」の具体的内容を明らかにすることを試みたものである。

本論文の目次は以下の通りである。

凡例

略号および参考文献

序論

第一節 研究背景

第一項 「般若経典」における不退転の位置づけ .1

第二項 「般若経典」と東アジア仏教における『智度論』の影響

第二節 問題の所在

第一項 不退転の意味内容

第二項 不退転への到達過程

第三項 不退転の自覚

第四項 修道論上における位置づけ

第三節 方法論

第一項 『智度論』の著者問題における研究史

第二項 先行研究における方法論

第三項 本論における方法論

第四節 本研究の位置づけ

第五節 本論の構成

第一章 不退転の特徴

第一節 不退転の語義並びに思想的展開

第一項 語義

第二項 アビダルマにおける不堕と不退

第三項 諸大乘經典に おける不退転

第二節 『智度論』初品における不退転の基本的諸相

第一項 『智度論』初品について

第二項 初品第八菩薩論（卷四）

第三項 初品第四二大慈大悲義（卷二七）

第三節 『智度論』における十地の階梯

第一項 三種の十地三種の十地

第二項 ①「共の十地」

第三項 ②「但菩薩の十地」

第四項 ③「無名の十地」

第四節 『智度論』における不退転の分類

第一項 先行研究の指摘する二種類の不退転

第二項 三種類の不退転三種類の不退転

①初発心もしくはある地点（授記）からの不退転

②聖者の不堕と同様の意味合いで示される不退転

③声聞辟支仏を越えた段階として示される不退転

第二章 魔

第一節 「般若經典」における魔「般若經典」における魔

第二節 『智度論』における魔『智度論』における魔

第三節 不退転と魔の関係

第一項 魔の対象

第二項 魔の干渉方法

第三項 降魔

第三章 般舟三昧

第一節 『智度論』における般舟三昧

第一項 見仏の方法

第二項 般舟三昧による滅罪

第二節 不退転と般舟三昧の関係

第一項 観相念仏と法身

第二項 諸仏との関係

第四章 授記

第一節 「般若經典」における授記

- 第二節 不退転菩薩における授記と未授記
 - 第一項 四種授記
 - 第二項 授記の有無と無生法忍
- 第三節 不現前授記と授記の如き者
 - 第一項 二種類の不現前授記
 - 第二項 「如受記」と「近受記」
- 第四節 不退転と授記と無生法忍と魔の関係
 - 第一項 魔と授記
 - 第二項 授記の自覚
 - 第三項 不退転の記と燃灯仏授記
- 第五節 不退転と不退転地と授記
- 第五章 無生法忍
 - 第一節 語義と先行研究
 - 第一項 語義
 - 第二項 アビダルマにおける忍
 - 第三項 『智度論』における無生法忍
 - 第二節 『智度論』における無生法忍と問題の所在
 - 第一項 不退転並びに授記の自覚の根拠となる理由
 - 第二項 煩悩との関係と肉身と法身
 - 第三項 「七地沈空の難」
 - 第三節 真実の智慧としての無生法忍
 - 第一項 真実の智慧
 - 第二項 真実の信忍
 - 第三項 無生法忍と信
 - 第四節 衆生忍と法忍と柔順忍
 - 第一項 衆生忍と法忍
 - 第二項 忍の関係
 - 第三項 柔順忍
 - 第五節 阿羅漢辟支仏の智慧と無生法忍
 - 第一項 阿羅漢辟支仏との差異
 - 第二項 真の無生
 - 第六節 無生法忍獲得の過程と自覚
 - 第一項 「七地沈空の難」
 - 第二項 福德と守護の必要性
 - 第三項 肉身と法身

結論

大乘仏教において、「不退転」の語句は、特に「般若経典」において詳細に説示される。しかし、その意味内容は、様々な語句と関連して示されることから曖昧で複雑な一面がある。中でも、どのような課題を克服し、何を根拠に不退転とみなしているかという点は、明瞭とは言い難い。そのため、本論では、①不退転の意味内容、②不退転への到達過程、③不退転の自覚、そして、④不退転の修道論上の位置づけの四つの問題に着目した。特に、①から③の問題に言及するには、不退転と密接な関係にある語句の意味内容と不退転の関係を明確にする必要がある。本論では、特に関係が深いと考えられる魔、般舟三昧、授記、無生法忍を対象を限定した。

本論では、上記の四つの問題点に対し、『大智度論』における不退転の特徴を把握した後、不退転と関連する語句の意味内容並びに不退転との関係を検証した。

第一章では、『大智度論』の初品に示される不退転の特徴を把握し、より具体的な問題点を明らかにした。初品を検証した結果、『大智度論』では、無生法忍を得ている不退転地の者と、無生法忍を得ておらずに授記を根拠とする不退転の者がみられた。更に、『大智度論』に説かれる三種の十地説における不退転の位置づけ、先行研究が指摘する二種類の不退転について整理した。この結果、『大智度論』における不退転とは、授記と同様に将来に必ず仏と成ること、また、三悪趣に墮さないこと、声聞辟支仏に墮さないことというように、文脈によって異なる意味内容で説示されていると考えられる。

第二章から第五章にかけては、魔、般舟三昧、授記、無生法忍と不退転の関係を検証する。

第二章では、魔に焦点を当てた。「般若経典」並びに『大智度論』において、不退転は、魔を覚知して影響を受けない段階とされる。また、『大智度論』においては、魔が仏の姿形をとって菩薩に干渉する事例が多々見られる。この魔を降伏する方法として重要となるのは、諸仏の守護である。

第三章では、般舟三昧と不退転の関係を検証した。まず、不退転と関連する般舟三昧の具体的内容として、①現在諸仏からの聞法による疑惑の断と、②諸仏から離れないことという二つが挙げられる。

第四章では、授記と不退転との関係を検証した。検証の結果、『智度論』における不退転かつ未授記とは、行者が授記を自覚していない状態を指す。さらに、無仏の時代においては、無生法忍の獲得が不現前授記となる。

第五章では、無生法忍の意味内容と不退転との関係を検証した。まず、『大智度論』における無生法忍は、真実の智慧として示される。それは、不生不滅の観とともに、諸仏の真の智慧に対して疑いなく真実と信忍する智慧と信を意味内容に含むためである。このため、真実の智慧を忍受する智慧と信が不退転を根拠づけているといえる。

以上の考察により、以下のように言うことができる。

①不退転の意味内容については、主に、授記と同様に、将来に必ず仏と成ること、また、三悪趣に墮さないこと、声聞辟支仏に墮さないこと、というように文脈によって異なる意味

内容で説示される。ただ、無生法忍を得た不退転に限定すれば、無仏の時代に仏を志す行者の根幹にかかわる「仏とは何か」という問題がもはや問題とならない状態を意味し、また、仏を志す行道を妨げるあらゆる要素が、もはや道を妨げる障害にならないともいえる。さらに、自身と仏との関係が明らかになった状態ということができる。特に、授記や般舟三昧を通した諸仏との関係があるために、無量の衆生を救済する菩薩道においても不退転ということができる。

②不退転への到達過程に関しては、仏の視点からは一切衆生は不退転であり成仏するため、全ての衆生が不退転であると言うことができる。しかし、不退転の自覚は、無生法忍の獲得を意味するため容易ではない。

③の不退転の自覚は、無生法忍の獲得によって成立する。ただ、無生法忍の獲得は、真実の無生観や諸仏の智慧の忍受、般舟三昧の実践による法身仏に対する見仏、また、「七地沈空の難」を越える際に、本願に導く諸仏による守護並びに自身の修道過程の確証を諸仏から称賛されることなどを根拠とする。

④の不退転の修道論上の位置づけに関して、不退転とは、自身が仏道を歩む上で問われる真実性がもはや問題となくなってきた段階ということができる。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、『大智度論』を取り上げて、大乘仏教において極めて重要な意味を持つ「不退転」という概念について考察したものである。

『大智度論』は、100巻と浩瀚である上に、その成立に不明な点が多い。また、経典の注釈書という性質上、一つの課題に対して複数箇所而言及されており、まとまった思想として読み取ることが難しい。その一方で、東アジアでは極めて大きな影響力を持った。その意味で、取り扱いが極めて難しい文献である。このような『大智度論』に対して、著者問題を切り離し、『大智度論』の記述そのものに限定することによって問題が曖昧化してしまうことを防ぐという、興味深い方法を採用する。

そもそも、不退転（阿鞞跋致）という概念は、大乘仏教の修行階梯中の極めて重要な段階であり、修行者が目標とするような段階とされてきた。本論文は、そのような文献と概念とに正面から取り組む極めて意欲的なものである。不退転という重要問題に特化しながらも、複雑な性格を持つ『大智度論』に対する独自の研究を正面から取り扱っていることは、極めて大きい意義がある。目次構成やページ配分においても、著者が不退転という問題をよく検討していることが窺える。また、1930年代の研究から、まだ公刊されていないごく最近の研究までを参照していることは、当該問題に対する研究史を的確に踏まえた上で最新研究への鋭い感度を著者が持っていることを示している。

その上で、本論文は、実際の修行者の視点に立って論を進めている点にも特色がある。『大智度論』は大乘百科事典のように知識の集大成として捉えられることも多い一方で、中国で

は実践的な修行の指南書として用いられた。当然ながら、いまだ明確にはなっていない『大智度論』の成立状況においても、具体的な実践者としての立場が重要であったことは疑いがない。単に術語や概念を検討することに終始してしまいがちな中で、実際の修行者が直面するであろう問題に視点を置くことは、『大智度論』そのものの思想を明確にするために限らず、大乘仏教の様々な局面において様々な問題が提起された背景を考察する上でも重要な方法であると言えよう。

もっとも、このように対象を限定していくことの問題もある。

不退転という問題について、その概念や『大智度論』の記述が東アジアでどのような影響を与えたのかについては、全く述べられていない。本論文の意図がそこに置かれていなかったことが有効に働いていることは認められるが、著者が今後研究を展開していく際には、このような視点を考慮に入れることが期待される。

また、『大智度論』が先立つ思想から受けた影響についても考慮することも重要である。例えば、パーリ語の語根研究や「不退」の用例研究から、「般若経典」の用例をも参照しつつ、『大智度論』の不退転は「初期経典から思想的な関連を持ちつつ、新たな意味内容をもつ語句」であるとする。その上で、本論文では言語的な繋がりは見られない点に注目して、先立つ思想との関連については淡泊である。しかしながら、例えばパーリ文献においても既に正等覚にいたる階梯が詳細に示されている。更には、仏教以前のインド思想や初期経典にもパラレルと見做し得る思想が提示されている。同様の言葉を用いながらも重視する点をずらしたり、先立つ思想を踏まえながらも全く新しい言葉を用いたりすることによって思想は展開してきた。そのような射程を踏まえて当該文献の術語を検討することが望ましい。

もっとも、こういった点は、著者が今後研究を展開させていく上で考慮していくことが期待されるものであり、本論文の対象を限定することによって確実に言い得ることを提示していくという姿勢は、極めて誠実な姿勢であると評価することができる。

以上のように、本論文は、極めて複雑かつ重要な課題に対して、慎重かつ果敢に取り組んで確実な検証をおこなっているものであり、高い評価を与えることができる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2022 年 1 月 14 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、澤崎瑞央に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。